

風立ちぬ、いざ生きめやも

——堀辰雄の母と子の物語——

（下）

松原秀江

要旨

堀辰雄の文学を考える上で、『風立ちぬ』以後、綾子との出会いを通して、特に『フランダースの犬』の果した役割の大きいことを、苛酷な人生を生きぬいた辰雄にとつての志気や多恵、広子の存在と共に述べた。

キーワード…生田・フランダースの犬・風立ちぬ・綾子・志気・多恵・マリア・更級日記・かげろふの日記・曠野

一

辰雄が『風立ちぬ』の節子のモデル、綾子に出会ったのは、昭和八年（一九三三）七月のことである。

昭和五年十月、『聖家族』脱稿後略血して自宅で療養、翌年親友の神西清に『失われた時を求めて』（傍点筆者、以下同じ）を贈られ、それを病床で読み始めただけでない、過ぎ去った幼少期を振り返り、後に一部改作して『冬の日』（後に『水のはとり』と改題）や、『墓碑の家』になる『本所』（後に『向島』と改題）を書いたことはよく知られている。そして更に次の年昭和七年（一九三二）、既に亡い生母・志気や、恋敵（病身）の為諦めた初恋の少女・内海妙（亡くなるのは翌年）、自ら命を絶った生涯の師・芥川龍之介に焦点をあて、七月に『花を持てる女』（初稿）を、九月に『麦藁帽子』や『芥川龍之介の書翰について』を書き、十二月末には初めて神戸まで出かけている。そしてそこで見つけたサミュエル・ベケットの『ブルウスト』に刺激され、『再び見出された時』を読み始めている。

辰雄がこの時初めて訪れた神戸は、幕末（慶応三）に開港され、以来西の玄関口、即ち国際貿易港として栄え、現代に至るが、その名は生田神社の神領に付属する民戸、神戸（かんべ）に由来すると伝えられ、神戸の歴史は、その生田神社の歴史だとさえ云われている。そしてその生田神社の祭神が稚日女尊（わかひるめのみこと）（天照大御神の幼名）であり、その名が「稚くみずみずしい日の女神」を意味し、生田を「生きた」「生まれた」と読むのなら、その生田神社同様、辰雄がクリスマス・イヴの前日、小型トランク一つ持たずに出かけた神戸にも、「甦り」「再生」のイメージがあったと、考えてよいだろうか。クリスマスは云うまでもなく、キリスト降誕を記念する祝祭、北ヨーロッパの冬至の祭と融合したと云われ、冬至は又生命力の復活する節日である。⁽¹⁾ 芥川や片山母子に憧れ、精神的にも疲れ切った東大文科卒の辰雄は、天皇のいる京都に近い兵庫（神戸）の開港が、辰雄の母方を没落させ、辰雄たちの一生を台無しにした幕府瓦解の大きな原因の一つだったことを、その時知っていただろうか。又広子に教えられた『更級日記』を愛し、その日記について記した『娘捨記』には、『大和物語』にも触れるが、同じ歌物語である『伊勢物語』など素材にした名作『曠野』を書く辰雄は、その物語に、二人の男に熱愛された女が、すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり

の歌を残して入水する生田川伝説のあることを、知っていただろうか。神戸港は兵庫の港よりも、生田川・生田神社よりになっている。その神戸へ「風変わりな」旅に出かけた辰雄は、そこで「幼時を過ごしたT君（竹中郁がモデル）」と共に、居留地のあった元町から、

ユトリロ好みの風景のうちに新鮮な喜びを見出し、

ながら、北野界限を歩いている（『旅の絵』）。そんな辰雄が、既にそれらのことを知っていたなら、クリスマス・イヴ（聖夜）の前日に、彼が神戸を訪れたことを、見逃す訳にはいかなidろう。

というのも、神西清が「堀辰雄文学入門」⁽⁴⁾で、『聖家族』脱稿後、東京にも「いたたまれなくなつて」出かけた⁽⁵⁾、神戸旅行に至るまでの辰雄の行為全般について、

何もの来るべきものへの準備をしきりにととのへながら

と記し、辰雄自らが、神戸旅行の折の「スケッチ風のもの」と云う⁽⁶⁾『旅の絵』（昭8・9）についても、「この作品には、今までの堀辰雄に見られなかった一種神秘的な暗い色調がにじみ出ている」と述べ、更に「旅行記ふうな小型作品でありながら、重厚なタブロオの重みをそなえてさえいる」と云って、

ある予示をふくんだ大切な作品のように私には思われる。

と記すだけでない、たたみかけるように、

そうしてついに『美しい村』が来た。

と続けているからである。

二

『美しい村』は、辰雄自らがふと気づくと、一種エトランゼのような気がしなくてもない（昭7・10『エトランジェ』、後に『軽井沢日記』と改題し、更に原題にもどす）が、何もかも知り尽し、「少年時の幸福な思い出」の「ほとんど」が結びついているような高原、軽井沢が舞

風立ちぬ、いざ生きめやも（下）

台である。そこで初めて知り合った「女友達との最近の」心にもない「悲しい別離」、その間の「完全な無為」を主題に、小説を書くようにして書けないでいる私の「暗い半身」が、「まだ誰も来ていない」初夏の高原の静かで孤独な「田舎暮し」の中で、もう一方の「明るい半身」に徐々に打負かされ、

男の子のように美しい田舎の娘がその林の中からひょっこり私の前に飛び出して来はしないか

などと期待したその通りのことが起り、記されてゆく。プルースト流の「修飾語の多い、息の長い、緩慢なリズムとテンポの独自の文体」で「女友達」とは勿論、『ルウベンスの偽画』や『聖家族』に登場する少女や絹子のモデル・片山総子（宗瑛）。『聖家族』で辰雄の文壇的位置は確立するが、そこに作者の恋人でもあるかのように描かれたことに、育ちも気質も違う総子は、「非常な当惑と、誇りを傷つけられたような「ぶしつけを感じ」、我慢のならない「疑惑」までもって、辰雄は犀星、その他の人々の「心をわずらわせ、自分も深く苦しめねばなら」ない状態に、落ち入っていた。⁽⁵⁾ 広子にも秘かに憧れる辰雄を、「神戸くんだり」まで行かせた少女である。『美しい村』には、

・最近私を苦しめていた恋愛事件

・私にはまたよく解らずにいる相手の気持

などと記し

・そんなものを書くことは、（中略）さらにもう一層自分自身をも、また他人をも不幸にするばかりである。

とまで述べて

・世間（中略）に向つて書いてはならないこと

と、『美しい村』ノオト⁽⁵⁾にも記している。

だが、そんな辰雄が、「古い絵のような」「牧歌的な」物語を書きたいと願いながら夢見た、

男の子のように美しい田舎の娘

は、必ずしもまっすぐに、綾子にはつながらない。もともと私の気持を一変させた『美しい村』の少女（綾子がモデル）は、次のように描かれている。

突然、私の窓の面している中庭の、とつくにもう花を失っている躑躅の茂みの向こうの別館の窓ぎわに、一輪の向日葵が咲きでもしたかのように、何んだか思いがけないようなものが、まぶしいほど、日にきらきらとかがやき出したように思えた。私はやっとそこに黄いろい麦藁帽子をかぶった、背の高い、瘦せぎすな、一人の少女が立っているのだということを認めることが出来た。

と。「麦藁帽子」は、初恋の少女、内海妙にも結びつき、辰雄にとっては忘れがたいもののようだが、ここで一際印象深い「向日葵」が、『聖家族』でも、次ように描かれていることに注目してみよう。

ホテルでは、夫人の部屋は二階にあつて、向日葵の咲いている中庭に面してゐた。そしてその中にほとんど一日中閉ぢこもつてゐた。そこへ一度もはひる機会のなかつた彼は、向日葵の下から、よくその部屋を見上げた。それは非常に神聖な、美しい、そして何か非現実的なもののやうに思はれた。

と。この背の高い「向日葵」と共に描かれる夫人（細木夫人）のモデルは広子、その彼女が彼（扁理、辰雄がモデル）には「非常に神聖な美しい」、「何か非現実的なもののやうに思はれた」のは、九鬼（師芥川がモデル）が彼女を「心から尊敬してゐるらしい」という理由で、「犯し難い偶像」になつていたからである。そんな心理的な束縛もない「背の高い、瘦せぎすな一人の少女」が、「向日葵」のように「まぶしいほど、日にきらきらかがやき出したように思えた」のは、辰雄がこの少女の内面に、綾子とは違う広子同様の「美しさ」を見出していたからだつたらう（マリアと関連して、後に詳述）。綾子は「長身瘦軀」の「美少女」だつた。のみならず「ドランぱり」の彼女の絵は、

こびたところや俗臭が微塵もなく、重厚な憂鬱さのなかにも若い女らしい清新なさわやかさと勁さを静かに漂わせている。と云われ、又、

当時の高原療養所の所長正木不如丘によると、女性患者は一般に微笑をうかべて回診の医師を迎えるものだが、綾子は特徴のある目だけにこりともせずに見つめるだけで、いわゆる愛想笑いをうかべる女性ではなかつた。

とも云われている。そしてそれは既に指摘されているように、『美しい村』の次の部分、

大概の少女たちは、自分が見つめられていと思う者からわざとそっぽを向いて自分の方ではその者にまったく無関心であることを示したがるものだが、そんな羞恥と高慢さとの入り混じった視線とは異つて、私の上に置かれているその少女の率直な、好奇心でいっぱい

い、な、よ、う、な、視、線、は、私、に、は、ま、ぶ、し、く、つ、て、そ、れ、か、ら、目、を、そ、ら、さ、ず、に、は、い、ら、れ、な、い、ほ、ど、に、感、じ、ら、れ、た

に、対、応、し、⁽⁷⁾「男の子のように美しい」にも相応するだろう。この少女の「き、ら、き、ら、と、輝、く」「大、き、く、見、ひ、ら、か、れ、た、眼、」が、「熱心に絵を描こうとしている時」、「すこし恐いような」、「男のような、きびしい眼つきになる」ことも見逃せない。だが、本籍は愛媛県今治市で、広島女学校（現広島女学院）付属小学校、同高等学部を卒業し、上京して女子美術学校にまで進んだ綾子を、「田舎の娘」とは云えないだろう。

だが綾子が絵を描いていることに注目すれば、この「田舎の娘」は、辰雄が愛読したと思われる『フランダーズの犬』⁽⁹⁾の主人公、大画家ルーベンスに憧れるネルロのたった一人の恋人のような遊び友達、彼の絵のモデルにもなっているアロアに重なるだろうか。アロアは十二歳、「まだほんの赤ん坊位で柔かな丸々した」、「向日葵」ならぬ「薔薇の花の様な姿（後述）に、パツチリ黒味がかった瞳の愛らし」い「天真爛漫」な少女である。綾子が「ナチュラルウェーブの髪をした美少女」であるのも、アロアの「捲いた美しい髪の少女」に重なるだろう。その上彼女は、「岡の上の古い赤錆びた風車の家の娘」で、父親の粉搗屋は、村中で「一番の裕福な農夫」だった。村中で「一番の裕福な農夫」は、綾子の実父も養父も、今治銀行の頭取だったことに、似通うだろう。「風車」ならぬ「水車」が、『美しい村』では「半分壊れかけた水車」「水車場」「水車の道」の形でよく出てくる。のみならずネルロが十五歳、アロアは十二歳というのは、辰雄の全作品中、「屈指の初恋小説」と云われ、既に触れもした『麦藁帽子』の冒頭部分、

私は十五だった。そしてお前は十三だった。

にも似ていて、いかにもほほえましい。

しかもそれだけでない。この想いは、引つ込み思案で、「二人虫」だった幼年期の辰雄の「たった二人きりの遊び相手」の一人、辰雄と「おない年」のお竜ちゃんにつながってゆく。改めて『幼年時代』を見てみよう。そこには既に見たように、⁽⁹⁾中野重治が、

お前は歌うな

お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな

と「高らかに歌った」時、「その詩独得の美しさ」に「半ば同意しながら」も、これこそわれわれの人生の——少くとも人生の詩の——最も本質的なものではないかと思わずにはいられない幼年時代のささやかな幸

福、——それをこの赤まんの花たちはつましく、控目に、しかし見る人によってはほとんど完全な姿で代表しているのだ。……と辰雄が反論した「赤まんの花」——「路傍に生えて、ともすれば人を幼年時代の追憶に誘いがちな」地味で可憐な珍らしくもない小さな花——「赤まんま」を思い浮かべると、

いまだに私（三十四―五歳）には一人の目のきつい、横から見ると男の子のような顔をした少女の姿がくつきりと浮ぶ。と記している、そのお竜ちゃんにである。多恵は「堀辰雄の『幼年時代』⁽¹⁰⁾」で、この少女について述べた後、

そういう気の強い女の子に興味があったのかもしれない

などと云うが、そんな辰雄の心の奥、無意識の部分には常に、

・負けず嫌いで、勝気な人

・私のことだとすぐもう夢中になってしまう人

と、『花を持てる女』に記す母・志気が、いたに違いない。そしてそんな辰雄の深層心理にもつながる、「目のきつい、横から見ると男の子のような顔をした少女」お竜ちゃんは、「熱心に絵を描こうとしている時」、「すこし恐いような」、「男のような、きびしい、眼つきになる」、「美しい村」の少女にも、つながってゆくだろう。

つましくも幸せな幼年時代の現実と虚構の世界で、お竜ちゃんやアロアのような少女たちに出会っていた辰雄は、「ようやくその日の日を楽しむことができるようになった」⁽¹¹⁾「田舎暮しの中」で、思いも寄らずほとんど想い通りの、というよりそれ以上の現実、綾子に出会ったのではなからうか。『美しい村』には、「ふと気づくと、そこいらへんの感じが、それまでとは」「すっかり変わってしまった」、「私の知らぬ間に」、「夏らしい匂いが漂い出して」いたと記されている。

三

そして『風立ちぬ』は、次のように始まっている。

風立ちぬ、いざ生きめやも（下）

それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木陰に身を横たえていたものだった。

と。「熱心に」絵を描く節子（綾子がモデル）と、「その傍ら」で、邪魔にならないように静かに身を横たえている私（辰雄がモデル）——この部分から類推すれば、文学の世界で自らの人生を生き抜こうとしていた辰雄にとって、「男のようなきびしい」「恐ろしいような」「眼つき」で、「熱心に絵を描いている」綾子の姿は、恐らく逸することのできない魅力の一つだったろう。そしてそれは又、宗瑛という音読みの漢字だけの男のようなベンネームで、小説を書いていた総子の魅力でもあったと思われるが、『風立ちぬ』にも、一種の「芸術家小説」である『フランダースの犬』⁽⁹⁾のほのかな香りがある、というより思わぬ所での深いつながりがある、と云ってよいだろうか。

『フランダースの犬』のネルロは、愛犬パトラッシュと共に、乾草の上に坐るアロアを写生していて、「或る日」コゼツの旦那（アロアの父親）に見咎められ、「心配事」が起らない内にと引き裂かれてしまう。『風立ちぬ』にも、「不意に、どこからともなく」風が立ち、「画架と共に、倒れた」絵のそばに行こうとする節子を、

いまの一瞬の何物をも失うまいとするかのように、

「無理に引き留めて」「離さないで」いようとするとする私に、

まあ！ こんなところを、もしお父様にでも見つかったら……

と、節子が「曖昧に微笑」する場面がある。二人が森の中をさ迷っていた、「ある朝のこと」も記しておこう。次のようになっている。

「もう二三日したらお父様がいらっしゃるわ」

（中略）

「そうしたらもう、こんな散歩も出来なくなるわね」

「どんな散歩だって、しようと思えば出来るさ」

（中略）

「お父様がなかなか私を離して下さないわ」

(中略)

「じゃあ、僕たちはもうこれで、お別れだとかいのかい？」

「だって仕方がないじゃないの」

そう言ってお前はいかにも諦め切ったように、私につとめて微笑^{ほほえ}んで見せようとした。

と。ネルロもあきらめ、アロアに次のように云っている。

・お父さんの御機嫌を損ねないやうにして下さいね。

・僕と一緒に遊ぶのが御氣に入らないんでせう。でもお父さんは、方であなを可愛がつて居らつしやるんですもの。僕は御機嫌を損ねる様なことをしてはいけないね。

などと。

ここでネルロが、綾子やアロア同様、「薔薇色の顔をした髪の毛の綺麗な」、そして「黒みがかつた凛としたやさしい眸」の「美しい少年」だったことを、押さえておこう。そして辰雄も又そのネルロ同様、親のない（特に母親の「わすれ形見」の）貧しいが凛々しい美少年だった⁽⁹⁾ことものみならず、ネルロは「大畫家ルベンスのやうに成りたい」という「途方もない馬鹿げた夢を見」、辰雄もボードレールや芥川に憧れ、

僕もだいぶ一流の人々に可愛がられたんだから。いくらか堀辰雄も有名になつたんだよ。

と松吉宛書簡（大正十四年九月三日付）に云うように、少女たちに迎えられる為にも、「早く有名な詩人になりたいたい」（『麦藁帽子』3）と思っていた。コゼツの旦那に拒絶されたネルロは、

・僕も何時は偉くなつて見せますよ。

・僕を忘れないでね。アロアちゃん忘れないで下さいよ。僕、きつと偉くなるから。

とアロアに云い、

何時かは必ず幸福な未來が来る。名を揚げて再び故郷に歸る時には改めてアロアの父にまみえる。その時には決して斷られない。非常に歓迎される。

などと思っている。『風立ちぬ』の「私」（辰雄がモデル）も、

私がつつとしっかりと生活の見透しが、つくようになったら、どうしたってお前を貰いに行くから、それまではお父さんの許に今のままのお前でいるがいい……

と、「自分自身にだけ」だが、云い聞かせている。

もつとも綾子の父・透は、辰雄との仲を裂いた訳ではない。自ら勧めた縁談も、綾子の強い希望で断り、辰雄との婚約は勿論、療養所への同時入院も、『風立ちぬ』同様、「透の意向があった」と云われている。幼くして父（透の実兄）を失い、母にも再婚され（死別した辰雄より、哀れかもしれない）、身寄りのない姪の綾子を、透が不憫に思つて溺愛したとして、何ら不思議でもない。そんな透の心情を、頼る者もない綾子もよく知っていて、二人は恋人以上の親密な間柄だったろうか。『風立ちぬ』にはたとえば、次のような部分がある。

ある夕方、私は食堂で、お前がお前を迎えに来た父と食事を共にしているのを見出した。お前は私の方に、ぎこちなさうに背中を向けていた。父の側にいることがお前にほとんど無意識に取らせているにちがいない様子や動作は、私にはお前をついぞ見かけたこともない、若い娘のように感じさせた。

「たとい私がその名を呼んだにしたって……」と私は一人でつぶやいた。「あいつは平気でこっちを見向きもしないだろう。まるでもう私の呼んだものではないかのよう……」

と。万葉の昔、男が女に名前を尋ねることは、求婚を意味したようだが、今でも男が女の名前を呼ぶことが、既に親密な間柄であることを示すなら、「私の方にぎこちなさうに背中を向けていた」時の、節子の心情は明らかだろう。透からの手紙にも、「急に少女らしい目を赫かせ」、父の前だけで浮かべる「少女らしい微笑の下描きのようなもの」を見せる節子。「二人きり」になると、「父のもってきた菓子函や他の紙包」——「それは少女時代の彼女の好きだった、そして今でも好きだと父の思っているようなものばかり」だが、それをあたり一面に拡げて、私を「いくぶん気づまりに」させながら、「私の知らない馴染の人々や事柄」を、低い声で「さも愉しげに」話し続ける二人。そして「そのうちのある物」が、彼女に「私の知り得ないような小さな感動をさえ与えて」、彼女に「少女らしい輝き」の「蘇る」のを見ながら、私は「私の知らない彼女」の「子供らしい幸福」な少女時代を夢みている。

そんな私が節子と二人きりになった時、彼女に云った言葉に注目してみよう。私は節子に、

お前は今日はなんだか見知らない薔薇色の少女みたいだよ

と云っている。節子は「知らないわ」と、「まるで小娘のように」両手で顔を隠すが、綾子も辰雄同様、ひょっとして『フランダーズの犬』を読んでいて、二人にとって忘れがたい愛読書の一冊だったのだろうか。アロアが「薔薇の花の様な姿」をした「天真爛漫」な少女であることは既に述べた。そしてネルロも「薔薇色の顔をした」美少年だったことも。つまり「薔薇色」が二人にとって、幼い頃愛読した物語の世界を象徴する言葉だったらどうだろう。アロアに用意されたクリスマス・イヴは、又次のように描かれている。

クリスマス前夜であるから大きな粉挽場の中には何處にも何處にも檜の丸太で四角な芝地を設け、クリームに蜂蜜、甘い肉に麵麩、垂木には緑の瑞々しい枝を吊るし、落霜紅の赤い實が澤山なつてゐる枝の間から十字架像と時鳥の形をした置時計とが覗いてゐるやうに見える。アロアを悦ばせる爲めの紙作りの提燈に灯がつき、種々な流行の玩具や、眼ざめるやうな繪紙に包んだ甘い菓子もある。家中は何處へ行つても明るくつて楽しさうに、暖か味があつて親切さうに、御馳走でも玩具でも何もかもどつさりある。

と。コゼツの旦那に嫌われ、絵のコンクールにも破れたネルロは、吹雪の中をさ迷い、アロアの家付近に近寄ることさえできないのだが。だが、村一番の金持の子だったアロア（綾子も銀行の頭取の子だった）が、次のように描かれていることにも、注意しておこう。即ち、

兄弟も姉妹もない一人娘で、その青いセルの衣服には破れ目ひとつあつたことが無い。ケルメス祭の時には、両手に持てないほど澤山の金塗りの胡桃やお砂糖でこしらへた十字架羊など云ふお菓子を買ふことが出来たし、また始めて洗禮式に出かけて行つた時、その可愛い巻いた淡金髪の上にかぶつた大變贅澤なメクリン織の帽子は立派なもので、彼女のお母さんもお祖母さんも之れで式をしたのださうである。

と記す文の特に傍点部分である。綾子の髪が「ナチュラルウェーブ」だったことは、既に述べたが、透の買ってきた「細いリボンのついた」婦人帽を弄びながら、節子の何気なく髪を直し始める「手つき」に、私が「呼吸づまるほどセンシユアルな魅力」を感じる場面が、あつたりもする。ただか十二歳で、伴の嫁にと噂されながら、アロアの一番好きなのは、ネルロとその愛犬だったことも、婚約者のいた綾子と重なり、辰雄を幸せにしていたに違いない。

四

そして更に、サナトリウムに共に行く行かないの話になった時、次のような会話のあることを、見逃す訳にはいかないだろう。即ち、……いや、お前が来なくともいいと言ったって、そりあ僕は一緒に行くとも。（中略）……僕はこうしてお前と一緒に前からだ、どこか淋しい山の中へ、お前みたいな可愛らしい娘と二人きりの生活をしに行くことを夢みていたことがあったのだ。お前にもずっと前にそんな私の夢を打ち明けやしなかったかしら？

とあることを。「お前と一緒にならない前」を、『フランダーズの犬』など読んだ幼少期とするならどうだろう。そして「お前みたいな可愛らしい娘」が、アロアのような「可愛らしい娘」だったらどうだろう。幼い頃辰雄は、一冊の絵双紙に初めて接した時、その美しさに驚き、「それを愛し」、現実とは全く「別箇」の「物語の世界」に憧れ、「一種の切なさ」とともに、「どこか遠いところから来る云い知れぬ感動のようなもの」を、味わっていた。そしてその後数々の絵双紙や絵本、思いも寄らぬ現実に触れるうちに、目の前の現実に「対抗できるほどの新しい見事な世界」を、夢見るだけでなく、創り出すロマネスクな世界の世界に踏み込んでゆく（『幼年時代』供水・芒の中など）。

『フランダーズの犬』では、ネルロがアロアやパトラッシュと共に古里で遊ぶ姿を、次のように描いている。

一、所に野原に行ったり、雪の降る中を走り廻ったり、或は野菊を摘み、苔桃をとつたりして遊んだ。或る時は手を取りあつて古ぼけた灰色の教會堂にはいつたり、また或時は水車小屋のなかに焚く幅の廣い樺火のほとりに並んで坐つたことも屢々であった。

と。この「楽しいげな様子」は、教会や水車があるだけでなく、「あちこちに花が咲き（白い小さな野薔薇であることが多い）、美しい自然がそのままの形で残されている」「原っぱのような」、そして又、「ふるさと」とも云えるような辰雄の大好きな軽井沢（軽井沢と堀辰雄¹⁰）、そこで出会ったばかりの頃の辰雄と綾子が、キャンバスを肩に一緒に絵を書きに出かける姿に、重ねることできるだろう。だが、ネルロ同様親のない貧しい身の上だっただけでなく、当時は死と隣合わせだった結核にも苦しんでいた辰雄流に、「清く寂しく」染め直すなら、この場面は彼が後に魅かれてゆく万葉集の挽歌にも似て、彼が好きだった雪の中の、サナトリウムのある「淋しい山の中」にもなるだろうか。『風

立ちぬ』には次ような一節がある。

私は数年前、しばしば、こういう山の淋しい山岳地方で、可愛らしい娘と二人きりで、世間から全く隔たつて、お互いがせつなく思うほどに愛し合いながら暮すことを好んで夢みていたころのことを思い出す。私は自分の小さい時から失わずにいる甘美な人生へのかぎりない夢を、さういふ人のこわがるような苛酷なぐらいの自然の中に、それをそっくりそのまま少しも害わずに生かして見たかったのだ。そしてそのためにはどうしてもこういう本当の冬、淋しい山岳地方のそれではいけないのだ……

と。そんな所で共に暮すには、同じ境遇の綾子はいかにもふさわしい。『風立ちぬ』の中で私（辰雄がモデル）は、

このおれの夢がこんなところまでお前を連れて来たようなものなのだろうかしら？
とまで云っている。

だが、両親にも健康にも恵まれたアロアとは違い、どちらにも見離されて孤独な綾子は、叔父で父親にもなっている透は勿論、綾子を「絶えず支配している」「すべて」のものに、節子同様「素直に身を任せ切つて」いたのだろう。それはいかにも、「勁く」「さわやか」な綾子の性格にふさわしい。「もう行き止まり」のような所から、「生きられるだけ生き」ようとしていた彼女は、「身の終わりを予覚しながら、その衰えかかっている力を尽くして、つとめて快活に、つとめて気高く生きようとしていた」。そして「恋人の腕に抱かれながら、ただその残される者の悲しみを悲しみながら、自分はさも幸福そうに、死んで行」こうとしていた。だがだからと云つて、私が、

①節子！　そういうお前であるのなら、私はお前がもっとも好きになるだろう。

と云うのは、そんな理由だけからだったろうか。そして又この少し後でも、

②人生というものは、お前がいつもさうしているように、何もかもそれに任せ切つておいた方がいいのだ。……そうすればきっと、私達がそれを希^{ねが}おうなどとは思ひも及ばなかったようなものまで、私達に与えられるかもしれないのだ。

とまで云っているのは何故だろう。『ルーベンスの偽画』や『聖家族』を読んできた者にとっては、いささか唐突で素直に理解しがたいように思われる。

だが、昭和十年十二月綾子を亡くした辰雄は、昭和十三年七月犀星の推薦で、『幼年時代』を書き始めている。そこに記される幼い頃の

辰雄を、再度思い出してみよう。数字が好きで、その分生れつき知的な彼は、「分からないままちや氣がすまない性分」(昭和十二年十二月三十日(夜) 輕井澤二三〇七より 多恵宛書簡) だったにもかかわらず、身寄りのないおばあさんをはじめ、「やさしく愛し合つて」暮す周りの人を困らせないように、不可解なことも「訊こうともせずに、まるで自分の運命、そのもののように、それをそのまま鵜呑みにしようとする」力」ている。そして恐らくみんなが期待したように、ただもう甘えられるだけ甘えて、そんな「自分の悲しみがすべてを好いほうに向わせていたらしいことに、一種の自負に近いものを感じ」ていた。これはほとんどそのまま②に重なり、だからこそ①のような想いにもなったのだろう。換言すれば、総子との危機的な状況の中で、辰雄は幼年期の自らと同質な綾子に出会い、思いも寄らないそのさわやかな風のような幸運は、辰雄に「何物かが生まれ、来つ、つある、かのような」予感を抱かせ、たまたま出会った一陣の風に向つて、ふと、

風立ちぬ、いざ生きめやも

と、口を衝いて出たポール・ヴァレリーの詩の一節を改変した言葉を、繰り返さただけでない。やがてサナトリウム行の話が出た時、「それを私が言い出すのを父が待っている」としか云いようのない言葉を、「つ、い、と」口に出させてもしまったのだろう。

なんでしたら僕も、一緒に行つてもいいんです。

と。だがその「山の中」が、彼にとつて如何に望んでいた場所だったか、既に述べた。

のみならず、この父親と婚約者の二人が、その時「お互いに感じ合つて」いた「一種の同情のようなもの」が、死の直前辰雄と透に遺した綾子の次の言葉、

・私、本當に幸福だった

・いい人を持たせて上げて下さい

をバネに、辰雄に更なる幸運をもたらすことになる。昭和十二年夏、追分で辰雄に出会った多恵は、透や綾子の妹・良子に「すっかり」氣に入られ、その二人の尽力で辰雄と結婚することになるのだから。

にもかかわらず辰雄は、総子の場合同様、

お母あ、さんがなかなか僕、なんぞのところに君を寄こしさうもない

と、彼女の母親を「一番恐れて」いた。

無精髭をはやし、髪をくしくしやくしやにして、両手を帯の間に突込み、背中を一寸まるくして、俯向きかげんにいつも何か考へながら歩いてゐた

文士風情の辰雄を、アロアの父親同様、多恵の母親（父親は総子の場合同様、亡くなっていた）も警戒していると、辰雄が考えたとして何ら不思議ではないだろう。「作家生活の不安定さ」は、辰雄自身にとつても、結婚を「決心するまでいくども二の足を踏まされるほどの」大問題だった（昭和十三年二月四日向島より 多恵宛書簡）。しかも結婚を決め、親友の神西清（父は病死、母は彼の教育の為再婚）や、葬儀委員長まで務めた川端康成（中学三年で祖父にも死なれた全くの孤児）らに報告に行つた鎌倉で、辰雄はまたもや咯血し入院までしていた。

この結婚は取りやめることになるだろう、お母さんも許さないだろう

と辰雄だけでなく、誰もが思ったに違いない。だが多恵の母は、「約束」したのだから、「回復するまで待つていたら」と云い、出会つた時は、「いいをじさん」としか思つていなかった多恵も、後に「偉そうで」「ちよつと恥ずかしい」、「若かつたから」と謙遜しながら、その時は、

この人と一緒になつてこの人を健康にしてあげて、いい小説を書いてもらうようにしよう

と思つたと云うのである。手紙にも書いたらしい（堀辰雄―妻への手紙⁽¹⁰⁾）。

多恵は「祖父の代からのキリスト教徒で、なに不自由のないりべ、ラルな家庭に育つただけでない。両親もその境遇にふさわしい、当時としては珍らしいハイカラな恋愛結婚だった。しかもその上、

母方の祖先は『忠臣蔵』に出てくる土屋主税で、將軍慶喜が駿河に移されたとき土屋家の当主もともに駿河に移つた

と云われている⁽⁷⁾。つまり多恵の母方も、辰雄の母方同様、維新当時没落してゆく幕府方の人間だった。しかも『忠臣蔵』は既に見たように、幼い辰雄が隅田川の洪水で避難した時、古い「大きな問屋」の、「薄暗い」部屋の中の母親の膝下で、初めて繙いた絵、双紙の世界そのものだった。そしてその人としての「義」を重んじ（土屋主税に関して云えば、討ち入り当日、吉良邸の北隣の土屋家では、義士が本懐を遂げたと知り、高提灯を掲げて警護したという）、歴史を超えて、「日本人の深層心理にふれるなものか」をもつていと云われる⁽¹²⁾。「ドラマチックな」世

界の美しさは、それまで知らなかった「はじめての物語の世界」、現実とは必ずしも同じでない「いわば別箇の世界」を、幼い辰雄に「啓示するきっかけ」になり、やがて辰雄は「せち辛い」目前の「現実に対抗できるほどの新しい」虚構の世界を創ってゆく。結婚から亡くなるまで、そんな辰雄と共に過ごした十五年と二か月程、短いが、精神的な高みに達した幸せな時期はなかったと、多恵は後に回想するが、幼少期の体験を通して、多恵も辰雄と深くつながっていたと云えるだろう。

五

多恵が辰雄との結婚を決めることになった、辰雄の手紙を見てみよう。「私、本當に幸福だった」と云った綾子の言葉を伝えて、次のように記している。

③それがたとひ生き残つた者への氣やすめに言つたにせよ、私達のために本當に幸福だつたと最後に言はれたら、その瞬間からその生き残つた者たちはこの世に幸福といふものがあるのだといふことを信ずるやうな氣になると見えますね。

④——僕は元來、いろいろ本を讀んできたせゐか、人生に對してかなり懷疑的で、ともすれば生きてゐることの不幸を信ぜさせられて來てゐましたが、

⑤そのときから僕は人間の幸福——少くとも誰でも幸福な瞬間をもち得るものだといふことを、すこし逆説的にいふと、みんなのもつてゐる不幸の最高の形式としてさういふ幸福の瞬間をもち得るといふことを信ずるやうになりました。

と。この文の⑤の特に傍線部分に注目してみよう。何か少しわかりづらいのではありませんか。かつて①のようなことを体験し、あるいは知つて、腑に落ちない、心底納得できないでいた。そしてそれは恐らく、④の点線部分と深くかかわるに違いない。にもかかわらず③のようなことを実際に体験して、心から「信ずる」ようになった、というのだろう。とすれば①のような体験とは、——それは辰雄が大好きだった本の一冊、『フランダースの犬』の最後の場面を讀んだ時の、体験だったのではなからうか。

——大画家・ルーベンスに憧れる、乞食同然のみなしこで貧しいネルロは、コゼツの旦那に、アロアとの仲を裂かれただけでなかった。

粉挽場放火の濡衣を着せられて村八分になり、ようやくと命をつないでいた牛乳配達の仕事もなくした挙句の果てに、たった一人の心の支えだったお爺さんにも死なれ、あばら屋からも追い出されてしまう。その上頼みの綱だった絵の審査にももれ、にもかかわらず、さ迷っていた吹雪の中で拾った六千フランを、コゼツの旦那に届けると、愛犬・パトラッシュと共に、空腹の果てに死んでゆく。これでもかこれでもかと襲い掛る、「不幸」の連続だが、しかし辰雄の言葉を借りていうなら、まるで誰もが「もつてゐる不幸の最高の形式」のように、最後にたどりついた教会でネルロは、

一目でいゝ。見さへすれば……

と憧れ願ひ続けたルーベンスの名画、『十字架上の昇天』『十字架上の降臨』を、まるで奇跡そのもののように、見ることができるのである。雪は降りやんで、突然姿を現わした月の光の「夜の闇を蝕する」ような「大きな白い明るみの輪」の中で。

・見た。僕はたうとう見た。

・あゝ神様。此上は何も要りません。

と、クリスマスの前夜、ネルロが叫ぶこの「幸福の瞬間」は、この作品を読んだ誰もが、声も失なう程感動的だ。その時の辰雄もそうだったに違いない。後に死を目前にした綾子が、

・私、本當に幸福だった

・いい人を持たせて上げて下さい

と辰雄と透に云った時、二人は共に、ネルロとパトラッシュ同様、「闇」の中に突然姿を現わした、月の「光」を見るような想いだったのではないだろうか。しかもその上、

・あゝ神様。此上は何も要りません。

と、ネルロが云ったと同じ心境だったに違いない。のみならず「私、本當に幸福だった」と綾子が云ったその時、それは軽井沢やボードレール・芥川などに憧れていた辰雄にとって、誰でもない辰雄自身の原点、母・志気と共に過ごした向島での現実、に帰る瞬間だったのではないだろうか。クリスマス・イヴの前日、辰雄が生田に象徴される神戸を訪れたのも、『フランダースの犬』のこの場面に、導かれてのことだった。

たように思われる。

綾子が二十五歳の若さで亡くなるのは、昭和十年（一九三五）十二月。翌年五月、辰雄は『更級日記など』（後に『問に答へて』と改題）を発表している。勿論質問に答える形で、「僅かに讀んだ」日本の古典の中では、

「更級日記」などが随分好きです。

と記していることから、杉野要吉が指摘するように、昭和十年前後の「初期日本浪漫派の文学運動、なかんずく保田与重郎」の強い影響もあつたに違いない。『姨捨記』（昭和16・8 後に『更級日記』と改題）にも、

⑥保田与重郎君がこの日記への愛について語つた熱意のある文に接し、私は何かその日頃の自分を悔いるやうな心もちにさへなつてそれを感じながら讀んだものだつた。それ以來、再びこの日記は私の心から離れないやうになつてゐた。⁽¹³⁾

だがここではその『更級日記』が、『フランダースの犬』同様、辰雄の「少年の日からの愛讀書」だったことに、注目してみよう。辰雄はその理由を、

⑦小さな夢を彼女なりに切實に生きたい、この「更級日記」の作者などが、何となく僕には血縁のあるやうな氣がするからです。

（『更級日記など』）

と述べ、

⑧日本の女の誰でもが殆ど宿命的にもつてゐる夢の純粹さ、その夢を夢と知つてしかもなほ夢みつつ、最初から詮めの姿態をとつて人生を受け容れようとする、その生き方の素直さといふものを教へてくれた

（『姨捨記』）

からだと記している。これら⑦⑧の文章の傍点部分は、まさにネルロや綾子の生き方そのものと云えるだろう。

しかもそれだけでない。物語の世界に憧れ、源氏物語五十四帖を、「一の巻より」「後の位も何かはせむ」と、夢中で読みながら、自らは夕顔や浮舟に憧れる『更級日記』の作者の夢は、注釈書など読むのは大嫌いで、『源氏物語』など「樂にすらすら」読めなかつた辰雄に、その『源氏物語』も「前半」より、⁽¹⁵⁾

「若菜」の巻のあたり、それから「宇治十帖」など随分好きになれそう

光源氏より柏木や薫が、「親しみ深いやうな」気がする、といわせたその想いにも同質だったろう。というのもそれは、まるで活動写真で見る外国のような軽井沢で、犀星や芥川、みね子・朔太郎など、既に名をなした光輝くような巨大な文学者に囲まれ憧れながら、小さな白い野薔薇を愛し、既に当時の二十歳を過ぎ、従って立派な大人で、東京大学の学生だったにもかかわらず、「たつこちゃん」「たつちゃん」などと呼ばれて愛され、自らを「少年」と云わなければならなかった辰雄の心の秘密をも示すように思われる。柏木や薫は不義の物語の主人公、そして宇治十帖の浮舟と薫・匂の宮の恋物語は、生田川伝説を踏まえていると云ってよい。しかも「いまだ夢多く」、広子母娘にも憧れ、「異國の文學にのみ心奪はれて居」た頃の辰雄に、『更級日記』の話をしたのは、その広子（みね子）だった。辰雄は広子が、

その頃の私に忘れられがちな古い日本の女の姿をも見失はしめまいとなすつての事であつたかもしれない。

（『娘捨記』）

と云っている。この「古い日本の女」が、⑦の「血縁」や、⑧の「日本の女の誰でも」に深くかわるなら、そこには芸者に出て、既に妻のある浜之助に出会い、辰雄を生んで必死で生き、志も半ばで火に追われ水死した志気の姿もあつただろう。のみならず⑧の文章は、さうやつて少年の日に「更級日記」を読み、さういふ古い女のひとりに人知れぬ思慕を寄せてゐたのは、しかし私の心の一番奥深くで、だつた。私は誰にもその思慕については言ひ出さうとはしなかつた。

と続き、「只一度」「何かの話のついでに」、この日記が好きだという佐藤春夫の前で触れた時、「氣まり」が悪く、「しどろもどろに」なつたと記すことから類推すれば、「思慕」する「古い日本の女性のひとり」に、歌人でもある広子が重なつていたのではなからうか。そしてそれは又、「山梔子夫人」と云われながら、芥川に憧れる広子のひそかな想いだったかもしれない。この広子（みね子）が、「聞きわけのよい少年」辰雄に、『フランダーズの犬』を紹介した、母親のような人間の一人だったかもしれないことは既に述べた。^⑨『フランダーズの犬』が、明治から現代までおびただしい版を重ねて、日本の子供たちに読みつがれた大ベストセラーだったことも、ここに付け加えておこう。

そしてこの佐藤春夫にかかわる文章は、

それから數年立ち、他の仕事などに取り紛れて、いつかこの日記からも私の氣もちの離れ出してゐた頃、

と続き、⑥につながるのだが、杉野も指摘するように、辰雄は「昭和初年代」、「もっともハイカラな詩人としての自覚を持ち」、「日本文学

西洋化の改革の先頭をゆくひとり」になっていた。散文の世界でも、『ルーベンスの偽画』や『聖家族』を世に出し、新進作家としての頭角を現わしてゆく。それはいかにも、ネルロが「大畫家ルーベンスのやうに成りたい」と夢見たやうに、ボードレールは勿論、その影響下にあった朔太郎や芥川、みね子（広子）母娘も含め、軽井沢に集まる作家達に、憧れた結果だったろう。そんな時の辰雄の心が、『更級日記』から「離れてゐた」としても、不思議ではない。

だが、⑥の文章を再度見てみよう。特に傍線部分に注目し、保田與重郎が『更級日記』のまとまったものを発表したのが、昭和十年あるいは十一年であることにも注目すれば、辰雄がその「一文」を読んだ時と、綾子を失った時期は重なっている。「文」（そこには『フランダースの犬』も含まれる）と現実の世界で起ったことの二重、三重のショックで、『更級日記』は「それ以来」、辰雄の「心から離れないやうになつてゐた」のではなからうか。辰雄は、『聖家族』脱稿（昭5・10）の一月前、『末摘花』を発表し（昭5・9）、その二か月後『フランス文学を如何に観るか』の中で、既に次のやうに云つていたのだから。即ち、

美しいすべてのものは傳統的だ。（中略）傳統はいつも思ひがけないところ、みづみづしい姿をして、生き返つてゐる（中略）。フランスの作家たちは彼らの傳統をたえず若返らせることに努力してゐるやうに見える。（中略）僕はフランス文學を學べば學ぶほど、それを學ぶことの必要を痛感すると同時に、いつか日本文學の傳統についてもしみじみ考へずにはゐられなくなるのだ。

⁽¹⁶⁾と。であればこそそれらの体験はいかにも、既に云われている通りの結果を生んだのだと思われる。つまり先ずは何と云つても、「綾子との出会いと死別によって、その後の」「辰雄の世界は大きく方向づけられた」のだった。即ち、

綾子と生を共有しその死を看取ったことで、やがて彼は「日本の古い美しさ」に心を向かわせ、女性の生と死を歴史の中に辿る主題を獲得するのである。⁽¹⁷⁾

六

にもかかわらず、辰雄がクロードルの『マリアへのお告げ』や、グレコの『受胎告知』にこだわり続けるのは何故だろう。『マリアへの

お告げ』は、ネルロとパトラッシュがさ迷い、共に死んでいった雪の中の聖堂にも似た信濃の雪の孤独な山小屋で読んでいること、そして又『受胎告知』についても、辰雄の多恵宛書翰の次の一節、

僕の目の前にはあの、いつか君達と一しよに見たあの「受胎告知」のさまざまな繪が（あれも焼けて今は跡方もない）僕の手が届き、さうで、なかなか届かないやうなところに、ちらちらしてゐるのです

（昭和十二年十二月一日（夕） 輕井澤一三〇七より）

の傍点部分に注目すれば、これらの作品が先ず、ネルロにとつての『十字架上の昇天』や『十字架上の降臨』の位置づけに、よく似ていることがわかるだろう。辰雄が『受胎告知』や『マリアへのお告げ』に見ていたのは、「人間的なものの中への神的なものの闖入」、あるいは「人間的なものと神的なものと——の挨拶」（昭和十二年十二月九日輕井澤一三〇七より 多恵宛書翰）だった。『源氏物語』の中でも「宇治十帖」が「随分好き」なのも、そこに、辰雄が愛読した

「窄き門」のアリサを彷彿せしめるやうな女性なども出てくる

（『更級日記など』）

からで、アリサのような女性が、父・八の宮の遺言通り、御仏に仕える為、薫の求愛を拒否し続ける大君であることを思えば、辰雄はこれらの作品に、同質のもの、「血縁」関係を見ていたと云つてよいだろう。

だがそれから数年後、数々の御仏のたたずむ奈良で、『マリアへのお告げ』を読んだ時、「神的なものの人間性のなかへの訪れ」を、『受胎告知圖』同様「素朴に」愛しながらも、

その女主人公ヴィオレエヌの惜しげもなく自分を興へる餘りの純真さ、さうしてゐるうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げられてゆく驚き、その心の葛藤、——さういったものに何か胸をいつばいにさせ出してゐた。

とその複雑な胸の内を述べている。そして更に、

このカトリックの詩人には、ああいふ無垢な處女を神へのいけにへにするために、ああも彼女を孤独にし、ああも完全に人間性から超絶せしめ、それまで彼女をとりまいてゐた平和な田園生活から引き離すことがどうあつても必然だったのであらうかと考へて見た。

と云つてゐる。しかも、

この戯曲の根本思想をなしてゐるカトリック的なもの、ことにその結末における神への讃美のやうなもの

が、「人間性への神性のいどみ」のように感じられ、「何か異様なものにおもへて来てならなかった」とまで云いきっている(『大和路・信濃路』十月二 十月十九日、戒壇院の松林にて)。そして恐らくこのような思いが、貪るように西洋の文化・文学を学び、キリスト教に関心を持ちながら、辰雄がキリスト教徒にはならなかった理由かと思われるが、

こんどはどうあつても僕はエル・グレゴの繪を見て来なければなりません。(中略 僕のうちの何物かがそれを僕に強く命ずるのです。(中略) こんどそれを見損つたら、一生見られないでしまふやうな焦躁のやうなものさへ感ぜられるのです。

とまで云いきつて、大和路の旅の終りに「五時間」もかけ、「倉敷といふ小さな町まで」行つて見たエル・グレゴの「受胎告知」も、辰雄にとって次のようなものでしかなかった。

・それは思つたより小さなものだつたが、いかにも凄^い繪で、一ぺんにはねつけられ、しかたなく他のゴッホやロオトレックなどを一とほり丁寧に見て歩いてから、一番最後に再びそれに近づいたら、こんどはやつと少し平靜な氣分でその繪に向へた(中略) エル・グレゴなんぞの繪の自分たちにとつて、なまやさしいものでない

・すべてがいかに悲劇的な感じなのだ。……(中略) どうしてもまだその繪が分かつたやうで分らない。さう、分らないといふより、なんだかこんな繪がこんなところに来てゐるのが不思議な氣がしてくるのだ。なんだかそれがあるべき場所にゐないやうな……それほど何か異様なのだ……

(『大和路・信濃路』斑雪)

と。

改めて云うまでもなく、辰雄の人生は、幼い頃から「なまやさしいもの」ではなかった。福永武彦も、『花を持てる女』を読むと、

人生というのは一見穏やかに見える場合も、その蔭にむごたらしい波瀾を含むものだということを、あらためて感じた。(中略) 人生が泉のように、汲めば汲むほど深く、冷く、悲しいものであることを、人は次第に知つて行くのである。

と述べ、

あの穏やかな、やさしい人柄のなかに隠されている魂の苦しみは、一体どのようなものだろうか

と云わずにはいられなかった(『枕頭の書』堀辰雄に学んだこと)。そんな辰雄が母・志氣をマリアに、そして自らを、十字架を背負ったイエス・

キリストに、重ねることがあったとしても、不思議ではないだろう（辰雄は浜之助の子でもなかったのではないかと、囁かれることもあったらしい）。だが彼が求めていたのは、「異様」にしか思えない「人間性への神性のいどみ」や、「人間性から」の「超絶」などでなく、辰雄のその人柄同様、どこにもある路傍の小さな野仏や、「赤ままの花」などに見られる「つつましく」「穏やか」で懐しい、慈愛に満ちた「やさし」さだったのではなからうか。

亡くなる時、

私、本當に幸福だった

と、辰雄に心から感謝して逝った綾子の言葉を、『フランダースの犬』のクライマックスに重ねて伝え、文学のことなどよくわからない、「理科の人のところにお嫁に行きたかった」という九歳も年下の多恵に、辰雄は書翰で次のように云っている。

⑨又、例のお談義をはじめましたが、まあ僕がそんな餘計な事を考へる事の好きな、又、さういふものをこのせち辛い世の中に求めてゐる男であることがよく分かつて下さつたら、僕の仕事そのものの事なんぞあまり分かつて下さらなくともいいのです。寧ろよく分からないなりに、それが決して馬鹿々々しいものでないといふ事だけ信じてゐてくれたらそれが一番好い。作品のいい悪いに拘らず、苦しんだ仕事の報酬としては、さういう無批判的に仕事のあとの僕をねぎらつてくれる、温い胸が何よりなのです。ずっと前に死んだ僕のお母あさんのやうに、又、死んだ綾子だつてさうであつたやうに。……

（昭和十三年二月四日 向島より）

などと。更に又翌日には、次のような手紙まで書いている。

これまで僕のしかけてゐる仕事のことなどに就いて、度々君に手紙で高尚な事など喋舌つたこともあるけれど、あんなのはね、仕事を前にした僕のひとりごと、見たいなものなんだよ。丁度僕の前に君がゐたので、ひとりごとを言ふよりかまじだと思つて、君に喋つただけ。フロオベルはね、自分の書いた原稿をいつも聲の女中に朗讀してきかせてゐたさうだが、……たゞ分かつても分からなくとも、黙つて聞いてゐてくれる人さへあればよかつたのだよ。

（昭和十三年二月五日 向島より）

と。これは又、随分ひどい手紙のようだが、「黙つて聞いてゐてくれる人」と、「無批判的に仕事のあとの僕をねぎらつてくれる、温い胸」は、ほとんど同義だろう。「よしよし」（ここに居る、存在するだけですべてよし、よしよし）と、あやしほえみかける母親の愛は、絶対の信頼

と安心を、無力な赤ん坊に与え、幸せだなどと特に思わせない程の安らぎの中に包み込む。だがその母親はあるいは女性性は、「聲の女中」かもしれない、必ずしも幸せだとは云えないだろう。本妻と同居していた平河町の堀の家から、嫡男として育てられていた幼い辰男をつれて飛び出し、「余り話ができない人のようだった」(『わが愛する詩人の伝記』)と、犀星が記した辰雄の母・志気のように(辰雄はこの母の膝の上に乘せられるのが好きだった)。又、「いつ死んでもおかしくない重症患者」なのに、共に孤児で結核に苦しむ私達の「幸福を主題にした物語」を書き続ける私(辰雄がモデル)のそばで、静かに眠り、静かに私を見つめ、私を「幸福」にして、亡くなって逝った節子のモデル・綾子のように。

多恵は、戦中戦後の困難な時期、病身の辰雄のもとで、あらゆることを引き受けて孤軍奮闘し、生存中は「わぎもこ」と呼ばれ、死後は辰雄の文学の「語り部」として活躍する。キリスト教徒だった彼女こそ、「やさしい旦那さん」と彼女自身が云った辰雄のそばで、「惜しげもなく自分を興へ」、「自分でも知らず識らず」のうちに、「神」の高みまで「引き上げられてゆく驚き」を、体験した女性だったのではなかろうか。結婚前の、昭和十二年十二月一日付加藤多恵子・恩地三保子宛辰雄の書簡に、

六日は僕のマリアの昇天した日

とあること、綾子が亡くなったのは昭和十年十二月六日であること、そしてそれらに⑨の記述を加えるなら、綾子は勿論、志気も多恵も、又更に広子(みね子)^⑨も、辰雄にとってのマリアだったと云えるだろう。

七

そしてその多恵が、辰雄と知り合い暮したわずか十六年程の間の、しかも四年程の間に(それは辰雄が比較的健康だった時期だが)、辰雄独自の日本の古典に取材した作品が生まれている。

先ず『娼捨』(昭15・7)から見ていこう。というのも『娼捨記』(昭16・8 後に『更級日記』と改題)には、結婚して孤独も解消し、信濃の山中でひとり、「思いつめたように」暮すこともなくなった時のことが、記されているからである。辰雄は次のように云っている。

⑩或雜誌に依頼された短篇小説を書くために本當にしばらくぶりに一人きりでぶらつと信濃に出かけて往つた。そのときその山麓の古びた村と「更級日記」と——私が少年の日から別々にそれを懐しんできた二つのものが、不意にその折の私の餘裕のある心の裡で結び合はさり、私は再び王朝日記から取材して小さな短篇を書いて見る氣になつた。

と。『姨捨』は、辰雄の信濃への少年の日からの愛着と、『古今和歌集』読人しらずの次の歌、
わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

への関心から、『更級日記』を彼の「詩人としての勝手な読み方で」、創り直した作品である。

そして「山麓の古びた村」とは、

⑪私はおほく信濃の山村に滞在して、冬もそこで雪に埋れながら越すやうな事さへあつた。それらの日々は、私のもつて生れたどうにもならぬ遙かなるものへの夢を、或は其處の山々に、或は牧場に、或はまた樺や樅などの木々から雜草にまで寄せながら、自分で自分にきびしく課した人生を生きんと試みてゐた日々にはかならなかつた。

と『姨捨記』にある「信濃の山村」に他ならず、それが又「少年の日からの愛着」に結びつくのなら、既に見たように『フランダースの犬』にもつながるだろう。⑪の内容は、ルーベンスに憧れるネルロの日常、あるいは生き方にほぼ合致する。

しかもそんな孤独な信濃の山村で、『かげろふの日記』のような「煩惱おほき女の日記」を書いていたのは、

・自分に課した人生の一つの過程として、一人の不幸な女をよりよく知ること、——そしてさういふ仕事を爲し遂げるためには辛抱強くなければならぬと思つたからであつた。

と云っている。そしてその為には、

・私の対象として選ぶべき女は、何か日々の孤独のために心の弱まるやうなこちらを引き立てずんずん向うの氣持ちに引き摺り込んでくれるやうな、強い心の持主でなければならなかつた。

・それは見事に失戀した女であり、自分を去つた男を詮め切れずに何處までも心で追つて、いつかその心の領域では相手の男をはるかに追ひ越してしまふほど氣概のある女でなければならなかつた。

と云い、従つて、

・不幸になればなるほどますます心のたけ高くなる「かげろふの日記」を書いたやうな女でなければどうしてもならなかつた。

とまで云いきつてゐる。そんな「息づまるやうな苦しい心の世界」から「逃れて」目を転ずると、「決して世間竝みに爲合せではな」く、「淋しさう」に見えても、『更級日記』の中の「いかにも女の中の女らしい」「可憐といつてもいいやうな女」の世界は、「静か」で「何んとなく爲合せに見え」、それに比べると、

・本當にかはいさうなのは矢つ張り「かげろふ」の作者であるやうな氣がした。

・一つの試煉でもあるかのやうに自分をその前に立ち、續けさせてゐたのは、その何處までも詮め切れずにゐるやうな、一番かはいさうな女であつた。

というのであれば、『かげろふの日記』の作者・道綱の母は、深層で辰男の母・志氣につながつていただろう。

辰雄の作品の中でも、特に名作と云われる『曠野』(昭16・12)を見てみよう。『大和路・信濃路』(十月 二 十月二十四日夕方)には、折口信夫の論文に魅せられて、「捜して買つてきてあつた」本(おそらくこの作品の拠つてゐる『今昔物語』)の中の一話を紹介して、「人間性への神性のいどみのやうなもの」に、たえず苦しめられていた辰雄は、次のように述べてゐる。即ち、

⑫それは一人のふしあはせな女の物語。——自分を與へ與へしてゐるうちにいつしか自分を神にしてゐたやうなクロオデル好みの聖女と

は反對に、自分を與へれば與へるほどいよいよはかない境遇に落ちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。

——さういふ物語の女を見いだすと、僕はなんだか急に身のしまるやうな氣もちになつた。

と。そしてそれは、「僕も無理に背のびしなくともいい」「なんでもない女」の話だと云つてゐる。

ここで既に見てきた⑩の傍線部分、「少年の日」に注目すれば、⑫の「ふしあはせな女」は、『幼年時代』に記される辰雄の「幼時」の「たった二人きりの遊び相手」の一人、「色つやの悪い、瘦せた、貧相な女の子」、「粗末な、つぎはぎだらけの着物を着ていた」たかちゃんにも、つながるだろうか。彼女は、

一所懸命に私のために何をやつても、私の氣に入るようには出来なかつた。

にもかかわらず、「黒味がちな目に、しつとり美しい艶をもった子だった」とも、記している。「一人虫」の辰雄はいい気になって、馬鹿にしていたようだが、「氣立てのやさしい子」で、志氣の「お氣に入りだった」とも。このたかちゃん、志氣の不幸せな妹、年の離れた男の妾になり、後に辰雄が引き取り一緒に暮したおよんちゃん（西村よね）にも重なるだろうか。既に見たように、『姨捨記』で辰雄は、「自分に課した人生の一つの過程として」、「一人の不幸な女をよりよく知ること」をあげているが、結婚していた初恋の少女・内海妙が、昭和八年一児・玲子を残して、闘病の末肺結核で亡くなったことを知り、彼自身幸せでなかったにもかかわらず、というよりも、だからこそと云うべきだろうか、

もう三十にもなつた私は、人生といふものが男達にとつてよりも女達にとつていかにより悲劇的であるかを漸く知り出してゐる。

（『生者と死者』）

と記してもいる。男の幸せの為に身をひいた『曠野』の「不為合せな女」は、「田舎上りの見ず知らずの男に身をまかせて京を離れ」、本妻の家で婢として仕え、そこで元の男に見出されて氣を失い死んでいくが、⑫の点線部分と共にその女には、親や弟妹、子供（辰雄）にも、尽せるだけ尽して、震災の火に追われ、誰にも看とられず、隅田川の泥水の中で水死した志氣の面影も、あつたに違いない。

のみならず、この作品の最後の部分、

「しっかりといてくれ。」男は女の背を撫でながら、やっといま自分に返されたこの女——この女ほど自分に近しい、これほど貴重なものはいないのだということがはつきりと身にしみて分かった。——そうしてこの不為合せな女、前の夫を行きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じような詮らめで身をまかせていたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふこと、出来た唯一の為合せであることをはじめて悟つたのだつた。

しかし女は苦しうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶしがしそうに見つめたぎり、だんだん死顔にvariだしていた。……

は、『フランダースの犬』の最後の部分、ルーベンスの「二つの名畫」を見たネルロが、

・見た。僕はたうとう見た。

風立ちぬ、いざ生きめやも（下）

・あ、神様。此上は何にも要りません。

と感謝して死んでゆく最後の部分のバリエーションだと云ってよいだろう。そして更に、『姨捨』の六(終章)の終りの部分、かつて物語に憧れ、夢中だった少女が、物語のようなことは、現実にはあり得ないと諦め、「二十も年上の男の後妻」になって、夫と共に任国へ下る部分も。そこには、ささやかな「時雨の夜の事」を、唯一の思い出にして胸に秘め、

私の生涯はそれでも決して空しくはなかった――

と「目を赫やかせながら、ときどき京の方を振り向く女の姿がある。

辰雄は『幼年時代』の冒頭部分で、「自分の幼年時代の思い出」が、「いつか自分の現在の気もちと緬交ぜになってしまっている」ことを指摘して、「そこに自分の人生の本質のようなものを見出したい」と述べるが、「幼年時代の思い出」の中には、現実そのものもあれば、本や話などの虚構の世界にかかわるものもあるだろう。辰雄は昭和二十八年四十九歳の若さで、綾子の言葉通り「生きられるだけ生き」て、川端康成の云うように、辰雄の「病ひを見まもること」が、結婚後の「生きること」だったような、多恵に看取られ亡くなっている。

最後に、葬儀委員長を務めたその川端康成の言葉で、この稿を結びたい。辰雄の作品を、

みづみづしい清潔さが私を惹きつける。

作者の感覚が少年のやうな清潔な裸であることは、全く驚くべき

だと称讃した康成は、

・「童話」を持たぬ作家は、味氣ない

・作家の持つ童話には日本特有のものがあるのではないか

と述べている。そしてこの「童話」が辰雄の「作風を論ずる鍵となる」⁽⁷⁾とも。『幼年時代』に記された「赤ままの花」同様、辰雄が心ひかれた「地味で可憐な珍らしくもない小さな」野仏についても、彼自身が「メエル、ヘン、めいた石仏」(『樹下』)と云っていることもつけ加えておこう。『フランダーズの犬』は、日本の童話ではないが、明治から現代まで日本の子どもたちに好まれ、おびただしい版を重ねて、読み継がれてきた大ベストセラーであることも、ここに改めて記しておこう。川端康成の、

〔文芸時評〕昭7・2 新潮

〔作家と作品〕昭9・6 中央公論

堀君は西洋の純粹な詩精神をよくわがものとし、それを日本の伝統とよく交へた。

といった言葉と共に。

〔注〕

- (1) 日本国語大辞典(小学館)
- (2) 加藤隆文『生田神社』(学生社)
- (3) 兵庫県大百科事典(神戸新聞出版センター)・神戸港の歴史(冬鶴房) など
- (4) 堀辰雄全集別巻二(筑摩書房)
- (5) 丸岡明「堀辰雄―生涯と文学」(角川文庫『風立ちぬ・美しい村』解説)
- (6) 堀辰雄作品集第二・あとがき(角川書店)
- (7) 竹内清己編『堀辰雄事典』(勉誠出版)
- (8) 松原秀江「風立ちぬ、いざ生きめやも―堀辰雄の母と子の物語―(上)」(大手前大学論集第11号)
- (9) 松原秀江「風立ちぬ、いざ生きめやも―堀辰雄の母と子の物語―(中)」(大手前大学論集第13号)
- (10) 堀辰雄文学記念館編「野ばらの匂う散歩道―堀多恵子談話集―」(軽井沢町教育委員会)
- (11) 万葉集巻第一巻頭の次の歌
籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に 葉摘ます兒 家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて
我こそ居れ しきなべて 我こそいませ 我こそは 告らめ 家をも名をも
- (12) の傍線部分について、頭注(小学館日本古典文学全集『萬葉集』一)に、「男が女に名前を尋ねることは、求婚を意味した」とある。
- (13) 大衆文化事典(弘文堂)
- (14) 「昭和十年代の堀辰雄―「日本的なるもの」への接近姿勢をめぐって―」(北海道高校教育研究会『紀要』第二号)
- (15) 杉野は、この一文は『コギト』発表の「更級日記」であると推定している。「この論文の初出発表紙は『国語国文』(昭10・8)であるが、『コギト』(昭11・1)に再録、当時『コトギ』のうごきに注目していた堀は、おそらくこの再録論文をよんだと推定したい」と云っている。
- (16) 辰雄は昭和十四年三月、折口信夫の「源氏物語全講会」に通い、宇治十帖の講義を聴いている。以下の記述は、堀辰雄全集第三卷(筑摩書房)に収める『更級日記など』によっている。そこには又、
いくら讀みたくとも「源氏物語」などは原文ではなかなか讀めさうもありません
とある。
- (17) 保田與重郎も、「更級日記」(『コギト』昭11・1)の中で、次のように云っている

風立ちぬ、いざ生きめやも(下)

日本の王朝のことを、近代の泰西の學の言葉で表現してわかりましたといった顔する人は、何故西洋人が何百年思ひ用ひて今では彼らの呼吸の中にあるやうな言葉を使ふ代りに、日本人の呼吸の中にある言葉で、日本のことを語らぬのであらうか。（中略）この中に流れてゐる漫然とした詩の心を（中略）、もつと深切にこの美しい情緒を日本の歴史の中で闡明し、日本の美觀の傳統の中で照明して欲しいと願ひたいのだ。僕らが日本人として、民族の言葉で息してきたものの中で發見させて欲しい。

と。この時期、明治以降に取り入れた西洋文化が成熟し、そこで学んだことが、逆に日本文化を再發見する時代にもなっていたのかもしれない。

(17) 川端康成「あいさつ」(『文芸』昭28・7)

(18) 「堀君の文学」(堀辰雄全集推薦文 角川書店版)